

♪ 2020年度 *poco a poco* ♪

Nr. 19 2021年2月3日(水)

文責:プファイル・辰巳

外気に触れよう!

オンライン授業で3時間、4時間、5時間と毎日PCやiPadの画面を見つめてばかりいるのも、色々な面で疲れるのではないのでしょうか。音楽の時間にちょっと質問してみたら、外出制限のため外気に触れる機会が



極端に減っている様子が伺えました。人との接触は避けなければいけません、適度な運動は必要です。人ごみを避け、悪天候の合間を縫って上手に散歩に出たり、公園で身体を動かしたりしてほしいなと思いました。寒いとはいえ、換気をする折にお庭やバルコンに出て、外気に触れるだけでも気分転換になると思います。コロナ・ストレスを解消するためにも、毎日の過ごし方に工夫を加えてくださいね。2月も元気に過ごせるようにしたいものです。



音楽こぼれ話 <語源を探ろう ⑦

Orchestra のお話し ..続き >

前回はオーケストラの語源はギリシア語ですというお話でした。今回はオーケストラに対応する日本語「管弦楽団」について、もう少しお話を進めたいと思います。

オーケストラが西洋音楽と共に日本に紹介されたのは幕末から明治にかけての時代でした。それ以前の日本における西洋音楽は隠れキリシタンの中で伝承されていた礼拝音楽ぐらいでした。幕末、黒船が来航し、アメリカやロシアの軍楽隊の演奏を初めて聴いた日本人はとても驚いたそうです。その後も外国人居留地を中心に、日

本で西洋音楽が広まってきましたが、演奏は軍楽隊が中心でした。

日本における常設のオーケストラの基礎を築いた功労者は、作曲家の山田耕筰と三菱財閥の岩崎小弥太男爵と言われています。日本でのオペラ上演と常設オーケストラの設立を目指していた山田耕筰は、東京音楽学校を卒業後、西洋音楽愛好家で、自ら楽器も演奏した岩崎小弥太男爵の支援を受けて1910年からドイツへ留学しました。帰国後、1915年に軍楽隊と少年音楽隊、そして当時の愛好家の集う東京フィルハーモニー会などからメンバーを集めて、合同オーケストラを立ち上げたのですが、この時は私生活の問題から岩崎氏との信頼関係がくずれ、1年後オーケストラも瓦解してしまいます。

その後も、山田耕筰は日本常設オーケストラへの夢を捨てきれず、多くの音楽家たちと諍いをくり返しながらかも、夢に向かって努力し続けました。この頃山田耕筰と一緒に活動していた演奏家の一人に、窓際のトットちゃんでお有名な黒柳徹子さんのお父様の黒柳守綱さんがいます。黒柳守綱さんはヴァイオリニストで、N響の前身である新交響楽団のコンサートマスターも務めました。ちなみに黒柳徹子さんのお母様も声楽家だったそうです。音楽一家だったのですね。



さて、このようにして明治時代に日本のオーケストラの基礎が築かれていき、大正時代の終わりから昭和初期にかけて、まず東京で常設オーケストラが設立され始めました。この洋楽移入期に「オーケストラ」の訳語として「管弦楽団」という言葉が用いられるようになりました。

「管弦楽」は日本の伝統音楽である『雅楽』の用語です。雅楽では笙(しょう)や龍笛(りゅうてき)、箏(ひちりき)などの管楽器、琵琶(びわ)や箏(そう)などの絃楽器、そして鞆鼓(かっこ)や鉦鼓(しょうこ)、太鼓などの打楽器が使用されます。「管弦(絃)楽」はこれらの楽器の合奏の意味で使われていました。雅楽は1000年以上の歴史を持ち、現在でも宮内庁の儀式などで演奏されますが、その意味では世界最古のオーケストラとも言われています。この「管弦楽」が西洋のオーケストラの訳語として転用され「管弦楽団」という言葉が生まれたというわけです。

現在日本では北海道から沖縄まで、各地でオーケストラが設立され活動しています。それらのオーケストラの設立は、第2次世界大戦後の1940年代後半から1960年代が多いようです。何度も解散・合併を繰り返して、名前が変更されている楽団もあります。みなさんの故郷にも、常設オーケストラはありますか。